
親分の卒業宣言

三代渡吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親分の卒業宣言

【ZPDF】

Z0804E

【作者名】

三代渡吉

【あらすじ】

ヤクザの親分も卒業する時がやつてきた！親分は卒業式をやると言い出して、子分達がそれをお膳立てするが……。

その日、紅白組の組員達が全員集められた。ボスから今後の組の方針に関する宣言があることで、みんな緊張していた。

組員達は、久しぶりに召集されたこともあって、最近の自分の事情などを話しながら、ボスの登場を待つた。

ざわめきの収まらぬ中、ついにボスはやってきた。恰幅の良い体格をした、スキンヘッドの威厳のある人だった。

彼は、とても深刻そうな顔をしていた、むしろそれを通り越して青い顔をしているようにも見えた。

「まさか組の解散？」

「いやこれは……もしかしたら、どこかの組に吸収されてしまうとかじや」

「ヤバイやんか。もし敵対してる満十組なんかと混ざられたら、終わりやぞ！」

ボスの只ならぬ形相に、組員達は焦つてそれぞれの勝手な憶測を話し始めた。彼等は、ボスが目の前にきたことを忘れているようだった。

「おお、みんな集まっているな」

「あ、ボス」

「これから大事な話があるから、まず黙ってくれ」

組員達は、全員電灯がスイッチで消されたかのように、ピシッとして黙つた。ボスは、それを確認すると、一つ頷いて、首のネクタイを締めなおす。

そして、喉をウウンと鳴らして声の調子を整えると、先ほどのような深刻な顔で話し始めた。

「俺な、ボスを卒業しようと思つ」

「ええ？！」

その言葉に、組員達は騒然とした。はつきりいって、意味がわからなかつたのだ。

「バスを卒業つて」

「俺な、もう十分バスやつただろ。だからもつそろそろ卒業しても良いと思つて」

「そもそもしれないけど、辞めるとかじやなくて、どうして卒業なのですか？」

するとバスは、信じられないことじつた顔で、組員に答えた。

「お前なあ、辞めるとか無責任なことしたら末代までの恥になるだる」

「じゃあつまりは、辞めるといつ事を言い換えただけですか？」

「そうじやねえ。卒業するんだから、俺は今までのバスとしての全過程を終了したことをお前らに認められないといかん、だからお前達には卒業式をやつてももらいたいんだよ」

「へーー！ といつ驚きと不安と焦りと不満の声が同時に人々からあがつた。バスは、その反応にイラッとして、眉間にシワを寄せた。

「なんだオメヒラ。俺がバスとして足りないとこりがあるとでも言うのか？」

「いいえ、そんなことはありません。早速卒業式を準備いたします。

いくぞ野郎じも」

組員達は、それぞれ複雑な感情を背負いながらも、バスの卒業式の準備を始めた。

「これより、卒業式を始めます」

気持ちだけの精一杯の歓声が巻き起つた。皆バスを慕つてゐる

が、いきなり変なことになつて、戸惑つてゐるのだ。

出席者達は最初集まつた組員だけ、場所もさつきと回り、違うのはパイプ椅子が並んでいるのと幕が下がつてゐるところが、それでは壇上にお願いします

「お、おひ」

ボスいり血漫のスキンヘッドに、冷や汗がたくさん湧き出していた。ボスは実を言つと、緊張しやすい性質だつた。

「卒業証書授与……やりづれえ」

「な、何か言つたか？！」

あまりにも緊張してしまつて、片腕的存在である彼の本音に、思わず口が出てしまつたのだ。

「い、いえいえ。では恐れながら、証書を授与させさせていただきます」ワーッとまた歓声があがつた。何分彼等は荒仕事に忙しくて、卒業式のやり方を忘れていた。

「静かにしねえか馬鹿ども！ 卒業式つてのはもつと静肅にやるべきなんだ！」

『へ、へい！ すいません！』

組員達は、まるでよく管理された機械の動作の『』とへ、ピッシリと頭を下げた。

「では気を取り直して……」

「大変です！」

すると、卒業式の最中だといつのに、一人の組員が慌てて中に入つてきた。皆が、ギロッとその乱入者に視線を集中させた。

その威圧感に押されながらも、彼はなんとか声を絞り出して報告した。

「五郎の奴が、満十組の奴に殺られました！」

「なんだとお？！」

ボスが思わず声をあげて憤つた。それを聞いて、ボスの片腕である彼が、ボスに言つた。

「……ボス。まだこの証書は渡せませんね。満十組の奴等潰して、

ようやく卒業つてことにしてしましょ「や」

「そうだな。いくぞ野郎ども！奴等を血祭りにあげてやれ！弔い合戦と卒業試験だ！」

おーっ！と、今度は気合の入った組員達の絶叫とともに、幕は引き裂かれ、パイプ椅子は倒され、会場は無茶苦茶となつた。

人が皆出払つた会場に残された片腕と、報告にきた男は、ひそひそと話し始めた。

「これで卒業なんてボスはやめてくれるよな」

「五郎が死んだなんて嘘ついて、これは賭けですよ」

「いや、ボスにハツタリは通用しねえから、俺が殺した」

「えつ」

「悪いと思ってるが仕方ない話だ。その分俺達が頑張つてやるしかないだろ？」

「……」

二人は、五郎の尊い犠牲に対しても福を静かにささげると、ボスの後を追つた。

「俺を組員にしてください！」

その頃、満十組で五郎という血まみれの男が仲間入りを果たしたこと、紅白組はまだ知らない。

(後書き)

電撃リトルリーグ第一回作品。「卒業宣言」からタイトルだけ変更して掲載。

山篭りする前に追い詰められて書いた、かなり背水の陣の感覚がよく見える作品でした。はつきりといって駄作ですが、一応これも一つの糧ということで。

さて、近況ですが、初めて投稿原稿を送りました。怪社を全改稿して、設定を見直したものです。もう少しライトノベルを意識した作品にしたんですが、どうなんだろうなあ。キャラの濃さには自信あるけど、一次も抜けられないかなあ。

あ、そもそもここに載せたままでよいのか。誰か教えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0804e/>

親分の卒業宣言

2010年10月11日00時42分発行